非核・いしかわ

2020 年 11 月 20 日　月刊第 268 号

〒920-0848 金沢市京町 28-8　石川民医連労働組合気付
非核の政府を求める石川の会
TEL 076-251-0014　FAX 076-251-3930
http://hikakuishikawa.com/

非核五項目

① 全人類共通の課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める
② 国是とされる非核三原則（つくらず、もたず、もちこませず）を厳守する
③ 日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する
④ 国家補償による被爆者援護法を制定する
⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する

核兵器禁止条約の署名は 84 か国、批准は 50 か国（11 月 15 日現在）

1 面　崩壊するジャーナリズム ～なぜ権力と癒着するのか～　須藤春夫
3 面　核兵器禁止条約の批准　50 か国達成　被爆 75 年 意見広告をすすめる会呼びかけ　人会議・報告　新井田義弘
4 面　被爆 75 年　核兵器をめぐる国際情勢 ～核兵器禁止条約を中心に～　中村桂子
5 面　平和への願いを町名に込めた「引揚者の町」　神田順一
7 面　真理の探究と学問の自由　永山孝一
7 面　＜独標＞ 胸花（きょうか）　山口修治
8 面　いしかわの戦争遺跡めぐり　中西　優
絵手紙コーナー　広瀬勝子
編集室より
非核・平和の掲示板

【講 演 要 旨】

平和憲法施行七四周年記念・石川県民集会

崩壊するジャーナリズム ～なぜ権力と癒着するのか～

戦争をさせない石川の会・事務局長　須藤春夫

講演する須藤春夫さん
1943 年東京生まれ、専門はメディア論、法政大学名誉教授

Ⅰ．権力とメディアの関係

今日は、権力の暴走を監視して、くい止める役割を持つジャーナリズムが、うまく機能していない原因とその構造的な問題について話をします。

要点は二つあります。権力のメディア支配はこれまで広く言われているとおりです。けれどもう一方の、それを受けとめるメディアの側のしたたかさが無ければ、押し込まれてしまうだけです。これは個々のジャーナリストの問題だけではなく、構造的な問題です。そこが話の中心になります。

戦後は、少なくとも民主主義・自由主義を標榜していますから、権力とメディアの関係は、曖昧かつ不透明で見えにくいものとなっています。今や、憲法改正草案を提言して首相から推奨される全国紙、「政府が右というものを左と言えない」と公言する公共放送、首相の夜の会に馳せ参じるメディアトップ、高級官僚にすり寄る有力記者、という現状です。まるで愛玩犬です。これはジャーナリズムの崩壊そのものです。

Ⅱ．ジャーナリズムの役割とは

私は、英国の作家・ジャーナリストのジョージ・オーウェルの「**報じられたくないことを報じることだ。それ以外は広報に過ぎない**」という言葉が全てだと思います。結局は、権力は肝心なことを隠すものなのです。権力を監視し、その実態を暴き、虐げられ差別される側の視点に立つことです。

花鳥風月

プラスチック（合成樹脂）の海洋ゴミ。今「温暖化とプラゴミ」は地球の二大環境課題となっている▼ものづくりの素材は金属・木・紙・石・ガラスなどあるが、プラスチックは現代では最も汎用性の高い素材で軽く・耐熱・水・油・薬品・腐食・電気絶縁・着色・透明・硬軟・丈夫・そして安価なことからカタチを変えたあらゆる製品を私たちは使用している▼プラスチックは紫外線でもろくなり、欠片になり、更に小さくなってマイクロプラスチック（五㎜以下）となるが、半永久に消滅しない厄介なものだ▼更にプラスチックには酸化防止・難燃・可塑・硬化・透明・着色などの化学添加剤が大量に使用されておりゴミになった後も要注意だ▼鯨や魚、野鳥の胃から大量のプラゴミが発見され、地球生物の食物連鎖が心配されている▼土に戻す科学的生分解は残念だが実用化されていない。生産された製品は繰り返し使用する。使用済の製品は燃やさず再生品の原料にするしか道はない▼史上初のプラスチックは一八五六年にセルロイド製のビリヤードの玉で象牙に代わる素材として開発された▼樹脂とは樹液。漆・松脂・天然ゴムなどは自然界の産物である（平）

Ⅲ．日本のジャーナリズムはどう評価されているか

国境なき医師団による二〇年「報道の自由度国際比較」では、日本は一八〇ヵ国中の六六位でした。一七年に国連人権理事会は「メディアの独立」を中心とした勧告を日本政府に対して新たに行いました。その内容は、放送の独立を強化するための放送法第四条（放送番組の編集準則）の見直し、独立した放送規制機関を設置して総務省から独立させること、などでした。言論の自由への政治介入の余地を封じ、権利をより良く保証する透明性の高い制度を求めたのです。

さらに国連人権理事会は以下の勧告をしています。メディア企業・組織へは、①調査・報道に携わるジャーナリストへの脅迫や介入を拒否する姿勢を公に表明すること、②圧力に対する不断の警戒を怠らず、敏感な争点の調査・報道に携わるジャーナリストに対して十分な支援と援護を保証すること、を勧告しています。

またジャーナリストへは、①記者クラブ制度の影響について、ジャーナリスト集団で議論し、開放に向かって見直すこと、②ジャーナリスト独自の職能組織をつくり、自分たちで報道の独立を守るために立ち上がること、を勧告しています。

調査にあたったカリフォルニア大学のデービッド・ケイ教授は一七年に「日本のジャーナリストは会社への忠誠心が第一であって、ジャーナリストの同僚への連帯感やジャーナリズムの原理への忠誠心が乏しい」と記者会見で語っています。このように〝言論・表現の自由〟のためにたたかうジャーナリスト集団が不在、というのが日本の際立った特徴だと見られているのです。

Ⅳ．崩壊する原因は何か
～癒着の構造～

菅義偉首相は、総務大臣時代に放送行政を所管する権限をフル活用しましたし、また官房長官時代にＴＶキャスターやコメンテーターについて企業・組織経営トップに圧力をかけて降板させたり、特定の新聞記者へのバッシングを繰り返していました。また「見せる（都合の良い情報のみの開示）」「見させる（情報の脚色・演出による協調・誘導）」「見せない（隠蔽・改竄）」という統制も常態化してしまいました。ＮＨＫ経営委員会の任命や放送法第四条を理由にした行政指導も含めて、これらは政治権力による情報発信の統制であり、介入そのものです。

またメディアに内在する①古い、②高い、③デカい、④たたかわない、等の問題性を指摘せざるを得ません。

取材源はもっぱら役所と警察、ゴシップ中心、表面的な記事が主流で、物事を多角的に捉えた批判や分析は少ない、という古さは相変わらずであり、ガラパゴス化した体質となっています。ジャーナリストは高学歴・高収入ではあれ、批判的視点を養成しない日本の高等教育のなかで育ち、ジャーナリズムに必要な本質的な問題点の発見や、批判的に検討して真実を探る訓練がなされないまま記者になっています。日本はマスメディア大国でありながら、新聞資本と放送資本の結びつきが強く、大手が言論市場を独占しています。またメディア企業や組織や記者が長年、たたかわない体質にどっぷりと浸かっており、そこに生まれる癒着・萎縮・自主規制の体質は、政権に都合のよい情報一色になる傾向を助長しています。記者同士の「官邸と内部でつながっている社がある以上、記者会では迂闊に動けない」ような悪習は、意図的に打ち破る他ありません。

このようなガラパゴス化したメディア企業や組織は、閉鎖的な「部族社会」を構成し、会社主義の原理の支配は、言論・表現の自由の抑制機構として自動的に働くことにならざるを得ません。そして経営と編集の職能の未分離は、編集権が経営に帰属することに直結し、その「古い」体質が、もはや〝国民の知る権利〟に応えられなくなっている、と言うべきです。

Ⅴ．私たちはどう向き合えばよいか

ガラパゴス・メディアの情報にさらされる市民はたまったものではありません。市民の力でこれに風穴を開ける必要があります。既に二〇世紀型のジャーナリズムは桎梏（しっこく）と化しており、非営利組織の調査報道機関を新たに立ち上げるべきという動きも起こっています（ワセダクロニクルの設立）。

私たちの希望は「取材現場」の記者なのです。「市民の激励やご意見が励み」「外に出てみると共感しあえる人はたくさんいる」と感じる記者が、市民の後押しによって古い枠組みを打ち破り、メディアを通して市民と共同で権力や行政を監視していくという、メディア本来の役割を取り戻すカギを握っていると思うのです。

（文責・中村昭一）

◎一一月三日、石川県女性センターで開かれた安倍改憲ＮＯ！市民アクション・いしかわ主催の講演要旨です。

非核・平和のひろば

核兵器禁止条約の批准が五〇か国達成
～来年一月二二日発効へ～

一〇月二三日にジャマイカとナウルが、二四日にホンジュラスが核兵器禁止条約の批准書を国連に寄託し、批准が五〇か国・地域に達し、九〇日後の来年一月二二日に発効することが確定しました。被爆七五年の節目の年に「核兵器の終わりの始まり」への歴史的な大きな一歩となりました。

「核兵器禁止条約 1月22日発効」を掲げて怒りの昼デモに参加する川本事務局次長（右）

条約発効から一年以内に第一回締約国会議が、その後二年おきに会議が開かれ、非締約国や非政府組織（NGO）などもオブザーバー参加して核兵器禁止から廃絶への道筋を具体的に協議します。またコロナ禍で来年一月に延期された核不拡散条約（NPT）再検討会議でもNPT条約六条にもとづき、核軍縮から「核兵器の完全廃絶」にむけた真摯な議論が締約国会議と並行しておこなわれます。

世界で唯一の戦争被爆国である日本政府は速やかに条約への署名・批准をすべきです。当面条約に加盟できない場合でも、核兵器国と非核兵器国の「橋渡し」を自認するのであれば、日本政府は締約国会議にオブザーバー参加し、積極的役割を発揮すべきです。

・・・・・・・・・・・・・・・

被爆75周年の節目の年
「核兵器はすみやかに廃棄・日本こそ核兵器禁止条約に参加を」の思いを「形」にできました

意見広告をすすめる会事務局長
新井田義弘

十一月十三日、「被爆75周年　意見広告をすすめる会」の「呼びかけ人会議」を開催し、六月末からの約三ヶ月の運動の成果を確認し合い、核兵器禁止条約に日本こそ参加を！の世論を高める運動を今後ともすすめていくことを決意しあって、「すすめる会」の活動を締めくくりました。

十月九日付の「北陸中日新聞」の一ページ使った「意見広告」には、二三五団体一〇四三人の応募が寄せられ、「意見広告のポスター（A2判）」は一三〇〇枚作成した。

核兵器禁止条約の批准国が広がる情勢の〝後押し〟を受けて

二三五団体一〇四三人という数字は、目標とした二五〇団体一二〇〇人には届かなかったが、十五年前の二〇七団体八一二人から一回り・二回り広げることができた。今回の意見広告運動は「成功した」と評価できると思う。

国際社会では、核兵器禁止条約の批准国が徐々に五〇ヵ国に近づいていくという〝追い風〟を受けながらの取り組みになった。また県内では、二年がかりで取り組まれてきた『記憶の灯り　希望の宙へ　いしかわの戦争と平和』（発行＝石川県平和委員会／戦争をさせない石川の会）の完成・普及と重なり、相乗効果も生まれた。

核兵器廃絶と平和を希求する団体・有志の思いを〝可視化〟できた

長年反核・平和の活動を続け・支えてこられた民医連・新婦人の会の奮闘が〝土台〟になり、戦争法反対のたたかいなどでつくられた市民連合はじめ、〝草の根〟の市民運動としての各地の9条の会・年金者組合・健康友の会などの協力が得られたことが広がりをつくった。さらに「戦争をさせない石川の会」「原爆被災者友の会」「平和サークルむぎわらぼうし」などが全構成員に呼びかけていただいたことは大きな力になった。

こうして、核兵器禁止条約が発効するという歴史の転機の時期に、核兵器廃絶と平和を追求する諸団体とその運動を担っているみなさんの思いを「形」にすることができた。また、ほんとにささやかではあるが、核兵器禁止条約を発効させる運動の一翼を担ったと褒め称え合いたいと思う。

〝次の段階〟への〝足がかり〟ができた

意見広告のとりくみでは、初めて「原水禁」代表らとの率直な懇談ができたし、今後、核兵器禁止条約を実効性あるものにする〝次の段階〟へのステップ台にしたい。

◆「剰余金」は、今後の「核兵器禁止条約に日本も参加を」の活動経費にあてることになりました。

【講演要旨】

被爆75年　核兵器をめぐる国際情勢

―核兵器禁止条約を中心に―

長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）准教授
中村 桂子

日本の私たちの課題を問われた中村桂子さん

核の問題を自分事として

今大事なことは核兵器がもたらしている脅威は被爆地だからとか、日本は被爆国だから関心を持つというレベルをはるかに超えている。核の脅威はグローバルです。つまり地球温暖化の問題と同じように核の脅威は全世界の人々に等しく生存の危機にさらされている。しかし、世界の人々、とりわけ日本社会においてあまりに危機感が薄い。むしろ核兵器があるから安全だという幻想さえまかり通っている。

新型コロナの感染拡大のなかで来年一月に核兵器禁止条約（以下、核禁条約）の発効を迎えるという今、私は核に対する人々の意識の転換点になりうると考えている。世界中、日本中の人々でも核の問題を他人事でなく、自分事としてとらえる必要がある。本当に私たちの安全を守るものは何なのか、真剣に考えること。核禁条約の発効は魔法の一手ではない。条約をいかに活用していくのか、私たちの知恵と力が問われている。カナダ在住の被爆者・サーロー節子さんは国連会議で「核兵器の終わりの始まり」と発言している。

NPT再検討会議と締約国会議が並行する時代に

条約発効から一年以内に締約国会議が開かれ、その後二年おきに同会議が、さらに六年おきに検討会議が開かれる。従って来年以降は五年毎にNPT再検討会議、二年毎に核禁条約締約国会議が並行して国際社会のなかで動いていく。この両者がいかに有機的に相乗効果を持ってお互いに強化していくのかがこれからのポイントである。

締約国会議の今後の論点は二つある。一つは核軍縮の検証問題である。非核兵器国は核の解体・廃棄の検証機能を持たない。国際原子力機構（IAEA）は原発の軍事利用に関する検証しかできず、核兵器の解体や廃棄には関与できない。現在、この検証が可能な国は米国とロシアだけである。では非核兵器国はどうするのか、重大な問題である。

もう一つは核被害者への支援である。日本でも被爆者の線引きに大変な問題をはらんでいる。核被害者を定義し、誰がどのように支援していくのか、これも重大な問題である。今後、締約国会議でプロジェクトチームをつくり、議論して解決していくことになる。

日本が「橋渡し」を自認するのであれば？

この締約国会議には条約に署名・批准していない国もオブザーバーとして招待され、参加することができる。日本は核の検証問題では積極的に発言し、活動しており、唯一の戦争被爆国として核被害者支援のノウハウも提供できると思います。**日本が核兵器国と非核兵器国の「橋渡し役」を自認するのであれば、日本は当面、条約に加入できない場合でも締約国会議にはオブザーバー参加し、実質的な議論に貢献することを表明すべきだ。**このことが結果的にはNPTの核不拡散・核軍縮を前に進めることにつながる。貢献できるところではしっかり協力していくことが大事だ。締約国会議にてプロジェクトチームや専門家会議がつくられた際には、日本は被爆地の広島・長崎で会議を開くよう提案することも要望したい。

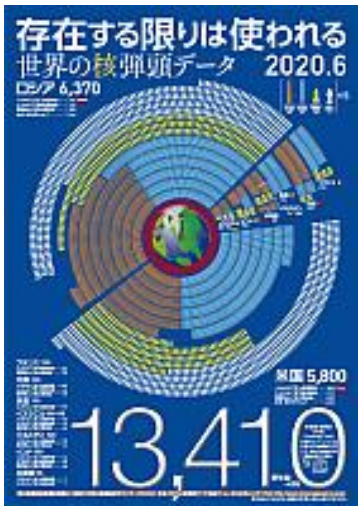
「核兵器禁止条約」発効その意味は？

核禁条約をつくった最大のねらいは、核への常識を変えることである。核兵器は非人道兵器であり、国際法違反である。核兵器に「悪の烙印」を押すことにより、核抑止に依存することの正当性を崩し、核兵器国と「核の傘」依存国に圧力をかけることである。核禁条約が世界の声であることを示すには批准国を圧倒的多数にふやし、普遍化することが不可欠だ。二〇一七年七月の国連交渉会議では一二二か国が核禁条約に賛成しており、その後の国連総会決議でも一〇〇か国以上が賛同しており、批准国はこれからも増えると思う。

被爆国日本がなぜ核禁条約に反対するのか、大きな疑問点だ。これまで日本政府は「唯一の戦争被爆国としての顔」と「『核の傘』の下の国としての顔」の二つの顔を使い分けてきた。**条約発効は日本政府が今後どこに向かうのかを問う、絶好のチャンスである。**

アメリカの「核の傘」の下の国は、日本、韓国、オーストラリア、北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）加盟国の約三〇か国である。このなかで連立政権が発足したベルギーは核禁条約が核軍縮や核不拡散を前に進める意義があることを認めて、核禁条約を核軍縮にどのように活用できるか、他のＮＡＴＯ諸国と検討することを表明している。この点は日本との大きな違いだ。

政府を変えるとは世論を変えること。世界の国々は綱引きをしている状態である。世界の多数派は核兵器のない世界を望む世界の人々、核兵器に依存しない政策をとる「真の非核兵器国」ＶＳ「核兵器保有国」九か国と「非核兵器国でありつつも、拡大核抑止力（「核の傘」）に依存する国々」約三〇か国の構図を認識することが大事だ。



日本の私たちの課題は？

「核兵器のない世界を実現する」「数を減らしながらでも永遠に持ち続ける」のどっちの道を選択するのか、あなたの望む未来社会は？

「核廃絶は理想的だが実現はむずかしい」「国は変わるわけがない」との観念にしばられている。思考停止状態だ。これが核問題の根っこにある。

コロナ時代だからこそ核兵器の問題を考えよう。核兵器廃絶国際キャンペーン（ＩＣＡＮ）がまとめた核保有国九か国の核兵器関連支出は二〇一九年度七二九億ドル（日本円で約七兆七二〇〇億円）。核兵器は使われなくても維持しているだけで湯水のように多額の支出がある。コロナ禍だからこそ本当に優先すべき政策・予算を考えよう。

核禁条約がめざす世界とは？

核禁条約がめざす世界とは、すべての人類の安全が守られる世界である。核保有国やその同盟国の一部権益を守るためではない。本当に人々の安全と健康と幸福が優先される世界。これが核禁条約の根底に流れる被爆国の願いであり、めざすべき世界のイメージである。コロナ禍の今だからこそ、核禁条約に込められた願いがより多くの人々の心にしみわたるのではないか。

核禁条約が間もなく発効すると私たちは核兵器があり、核禁条約がある初めての世界に足を踏み入れることになる。人類の存亡をかけた闘いに大きな一歩を踏み出しており、かってない大きな危機とかってない大きなチャンス、この両方が私たちに見えている。私たちの行動が問われている。サーロー節子さんの「核兵器の終わりの始まり」をいま一度、強調して終わります。

（まとめ　非核・いしかわ編集部）

◎一一月一日、核戦争に反対する医師の会がオンラインで開催した「第三一回反核医師のつどいin千葉」の講演要旨です。左上のポスターはＲＥＣＮＡ制作の「世界の核弾頭データ」です。

【投稿】

平和への願いを町名に込めた「引揚者の町」

神田順一

戦後七五年、被爆七五年の節目に刊行した**戦跡ガイドブック『記憶の灯り　希望の宙へ　いしかわの戦争と平和』**は、次の構成になっています。前半は一五年戦争（満州事変の一九三一年から敗戦までの一九四五年）における「天皇の軍隊　加害の歴史」「国民・兵士の被害の歴史」、後半は戦後七五年（一九四五年から二〇二〇年まで）を「混乱と復興の狭間で」「逆流に抗い平和を護る」をキーワードとして監修者、編集委員が分担執筆しました。

私が担当した項目は、「引揚者の町」「シベリア抑留」「被爆者」「非核・平和の自治体づくり」です。このなかで「引揚者の町」は、平和な日本を築こうという当時の人々の強い願いと希望を込めて「平和町」と名付けられており、平和への想いを伝える本書の戦後編の最初に掲載しました。

「引揚者の町」の当時の雰囲気がよく伝わる取材余話を紹介します。

●金沢市指定文化財「辻家庭園」代表取締役　辻卓さんへのインタビューより（二〇一九年一二月一六日、ご自宅応接室にて）

終戦のとき、私は金沢市立十一屋小学校の三年生でした。同級生は寺町台と野田・長坂から来ており、戦後は平和町の陸軍第九師団兵舎跡が海外からの引揚者住宅となり、その子弟が全員、十一屋小学校に大量に転校してきました。彼らから満州での生活、中国で日本人が行った蛮行、引揚時の悲惨な様子など戦争の悲惨さ、残酷さをたくさん聞きました。この時の強烈な印象が「戦争はいかなる理由があってもダメ」という私の原点になっています。戦争を放棄するという平和憲法が出来たときは子ども心に大変うれしかった覚えがあります。まわりの大人たちも子どもたちも大賛成でした。

（写真）平和町の命名開町式が開かれた「輜勲神社」は、輜重隊守護の象徴として創建された「営内神社」ですが、戦後は「平和神社」として改称され、その他の神社も合祀され、地域住民の氏神として親しまれている。

●金沢市立十一屋小学校六年一組（金森俊朗学級）が制作した紙芝居「戦いはまだ終わらない」の児童の作文より（一九八八年一二月）

岩佐さんが広島にいて、新しい生き方を考えていた頃、私たちの町も大きく変わろうとしていた。昭和二一年三月、満州にいた人たちが日本の降伏によって帰ってきた。しかし石川県から行った六六八五人のうち、半分の三〇一五人が死んでいた。生きて帰ってきてもすでに家のない人も多かった。約一〇〇世帯、安心して住める土地を求めて新しい町ができあがってきた。私たちの町、平和町もその一つだ。平和町のもとは、兵舎が立ち並んでいた。その兵舎を利用して住んだ。その時の兵舎は、トタン、木などで作ったバラックの家。中は、布などで真ん中をしきり、共同で住んでいた。兵舎の前は、畑だった。戦争で全てを失い、苦しい生活が始まった。

三二年前の金森学級の児童らは、祖父母や親からこのような苛酷な戦争の記憶を直に聞いて育った世代であり、被爆者の岩佐幹三さんの五時間に及ぶ証言を真剣に聴き取り、四八枚の絵と文をつくり、**紙芝居『戦いはまだ終わらない』**を完成させました。被爆七五年の今年、この紙芝居を原作として、「平和の子ら」委員会が、岩佐さんへの聴き取り、絵と文を二六枚に絞り込み、**歴史紙芝居『戦いはまだ終わらない』（第一部＝被爆体験編、第二部＝戦後・被爆者運動編）**を編集・再現しました。残念ですが、この紙芝居の再現を心待ちにされていた金森俊朗さんは今年三月、岩佐幹三さんは九月に相次いで逝去されました。

金森学級の６年生が描いた紙芝居原画

戦争の記憶、被爆の惨劇を風化させず、平和の取り組みを次世代に継承する願いを込めた歴史紙芝居は、一一月一五日に開かれた「金森俊朗さんを偲ぶ会」で完成披露し、販売が開始されました。

・・・・・・・・・・・・

◎再現された歴史紙芝居『戦いはまだ終わらない』（定価二〇〇〇円）は非核石川の会事務局も販売協力します。

【日本国憲法前文・平和主義（抜粋）】

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

非核石川の会リレーエッセー

真理の探求と学問の自由

永山孝一

コロナ禍に振り回された「巣ごもり」の夏が終わった。毎日手に取る新聞・雑誌・テレビ・新書版、スマホ、パソコンに押し込むＵＳＢ・・などを通して語りかけてくるものとは何だろうと考えながら、ふと気が付いてみるとセミの声やトンボの飛ぶさまが私の周りから消えていたのである。何をいまさらと言われるかもしれないが、この七〇数年、かつてなかったことである。

私が幼い頃の金沢は、エアコンなどあるはずもなく木炭自動車の北陸鉄道循環バスが走っていた。夏の午後、座敷で寝転んでいたら、わがもの顔で部屋の真ん中を通り抜けてゆく鬼ヤンマが幼心にも頼もしかった。秋の放課後、街はずれの北陸本線が通っているところに出かけ稲穂がたわわに実る田んぼでイナゴを捕まえて遊んだ少年時代ーーこうして自然とともにあった六五年の歳月が流れた。

今や、世界は「ＡＩの時代」の入り口にある。かつては生産設備のオートメーションといえども、人間の知能を代替はできなかったが、シンギュラリティ（技術的特異点）ともなれば、常識の転換は森羅万象に及ぶことであろう。

「バブル崩壊」という世界恐慌からもすでに三〇年が経過して、少子化と非正規労働は拡大し、新自由主義経済による資本の「自律的」な活動の進展が「拡大再生産」という生産様式発展への桎梏（しっこく）となって、生産様式の歴史的な停滞と激動の世界を呼び込む。

そんなことを考えていた矢先にコロナ禍という一〇〇年目の災厄が襲い掛かってきた。アベノマスクに給付金と、無策に失策を重ねて八月二八日遂に行き詰った安倍政権。その後を継いだ菅政権は、日本学術会議の推薦に基づく議員の任命を拒否し介入を強行した。これは学問の自由を守るべき政府の立場を逸脱する憲法違反の暴挙であり、こうした「専制」がなにをもたらすかは、日本と世界の歴史が明確に示している。

平野喜一郎氏（三重大学名誉教授）が雑誌『経済』（一一月号一三七頁）でーー「私たちの目には地球は静止しており太陽が動いているように見えます。ところが科学は地球のほうが太陽の周りを公転していることを明らかにしました。だからこそ科学が必要なのです。『もし事物の現象形態と本質が直接に一致するなら**あらゆる科学**は余計なものであろう』（新書版『資本論』第一三分冊一四三〇頁）とマルクスはいいます」ーーと述べたように、およそ学問・研究は事物の科学的認識によって未知の領域に分け入り、事物の現象から本質へと迫り、真理を探究する任務を負うものであり、日本国憲法も示すように**学問の自由は不可侵**なのです。

歴史に学ぼうとしないものは国の未来を語る資格はありません。

詩人会議かなざわ「独標」より

胸花（きょうか）

山口修治

中学一年生の時の担任の先生
髪を後にひっつめいつもつかつか早歩き
僕ら悪ガキ集団を遠慮なく説教し
そして
脳性小児麻痺の級友への援助の助言
なぜ学ぶのか　仲間とはなんなのか
生きていく基礎を全力で教えてくれた
たんぽぽが咲くと　思い出すのは恩師

家族六人の洗濯と食事そして機織り
仕事
休みなく働き続けささくれだっていた手
兄と僕を生み育て　祖父母と父を看取り
八十七才の人生を生き切った
じゃがいもの花が咲くと　思い出すのは母

真っ赤な　ソフトボールの中学生捕手
真っ白な　下校時のソプラノは歌姫
真っ紫な　誰もとおおらかに接する姿
紫陽花が咲くと　思い出すのは隣村の幼馴染

何もしなくていいからと誓って四十三年
二人の愛娘まで生み育ててくれ
風や雨の日も　雪の日もあったけれど
今も　ぞっこん
ひまわりが咲くと　帰路の歩が早まる僕

いしかわの戦争遺跡めぐり⑭

フォトグラファー　中西　優

金沢の人気観光地となったひがし茶屋街

浅野川沿いの主計町茶屋街

浅野川を中心に両岸にあるひがし茶屋街・主計町茶屋街は近年、金沢の人気観光地となりました。コロナ禍により海外の旅行者は激減しましたが、それでも連日国内からの旅行者が多数訪れています。

華やかな茶屋街ですが、実は「軍隊あるところに遊郭あり」と語られるように軍関係者の利用も多く、戦争との密接な関係の下に繁栄した一面も持っています。中には軍の仮設司令部が設置される料亭、貸座敷が売春施設として利用されたなどの例もあると言います。太平洋戦争中には人員不足から芸妓や関係者らが軍需工場に駆り出されることもありました。

絵手紙コーナー

金沢医療生協絵手紙班

広瀬勝子

編集室より

◎日本は米国の五一番目の州なのか、メディアは大統領選挙について延々と大報道していた。トランプ大統領は往生際が悪いようだが、菅総理も引けを取らない。学術会議会員の任命拒否の論拠とする「総合的・俯瞰的」「女性・年代・出身大学の多様性・偏り」「推薦制への変更時の法解釈手続き」「推薦名簿事前調整」論が総崩れになっても、「人事についての返答は差し控える」としか言えず、往生際が悪い。

思えば「衝突したけど戦闘ではない」「捨てたけど廃棄でない」「変えたけど改竄ではない」「募ったけど募集していない」「任命拒否したけど人事介入でない」と言い張った人たちだ。多くの懸念・反対の声を無視して、強引に**「核のごみ」最終処分場の「文献調査」に応募**（北海道寿都町、北海道神恵内村）したり、**女川原発の再稼働を「合意」**したりするくらい朝飯前だろう。かつて民意を圧殺して国を破滅させた反省など眼中にない。一体どこまで日本と日本語を破壊すれば気がすむのだ。非道を修正させるには**〝本気の共闘の旗を立て、行動を統一し、それを民が支援する〟**他ない。それが問われているのだ。（中）

非核・平和の掲示板

月	日	曜	時	集会・行事内容	会場
11	21	土	10:00	２０２０年日本平和大会ｉｎ東京（オンライン開催）	東京都内
	25	水	12:50	怒りの昼デモ	金沢市香林坊・いしかわ四高記念公園横入口
12	5	土	14:00	２０２０石川のうたごえ交流会	金沢市下本多町・金沢歌劇座別館大練習室
	8	火	18:00	１２・８平和を守るつどい／「天皇の代替りと戦争」　お話 漆崎英之さん	金沢市昭和町・平和と労働会館3階ホール
	9	水	12:50	怒りの昼デモ	金沢市香林坊・いしかわ四高記念公園横入口
	19	土	13:30	市民本位の金沢市政をつくる会／企業局の説明を聴く会＆総会	金沢市青草町・近江町交流プラザ4階集会室
	23	水	12:50	怒りの昼デモ	金沢市香林坊・いしかわ四高記念公園横入口
1	22	金		**核兵器禁止条約発効／日本政府に核兵器禁止条約の署名と批准を求める署名運動中**	

＊祝日は休日とします　＊毎週金曜日 18：30どいね原発アピール行動 金沢駅兼六園口　＊毎月15日石川県沖縄連帯デ― 12：00

＊会報「非核・いしかわ」サポート会員を募集中　年会費 2,000円　ゆうちょ銀行口座　00760－0－15689